

平城京出土の籌木

平城宮跡発掘調査部

奈良そごう建設に伴う左京三条二坊の発掘のうち、197次調査（1989年1月～3月）では、長屋王邸の北に接する二条大路上に東西溝 SD5100を検出した。この溝は737年（天平8）～739年（天平10）頃に掘ったごみ捨て用で、溝の幅は約3m、東西の長さは約130mにおよぶ。さて、土器や木簡など多量の遺物が堆積した溝を掘り進むうち、棒状品が東西60cm×南北50cmの範囲に幾重にも折り重なって見つかった。棒の長さは15cmから25cmほど、太さは5～6mmあまり。やや大きめの割り箸に似ている。棒状品の下部には筵の一部がみえる。筵の身の部分は粗い網代編み、縁は巻縁とする。網代は3～4mm幅に整えた材を1単位が2cm弱に編み、かなり隙間がある。筵の大きさは、縁が約40cm残存するのでこれよりやや大きい程度であろう。棒状品は筵の縁をおおうように散乱している。はじめは未使用の木簡かと思ったが、やや細い上に字や墨痕があるものはなく、結局籌木説が有力となった。おそらく籌木を筵に盛った状態で溝に投棄したのだろう。

籌木は用便の際に尻を拭う木のことで、糞べら、搔木、捨木とも呼ぶ。最近では、福岡市の太宰府鴻臚館遺跡や藤原京右京七条一坊の便所跡から見つかったが、197次の調査当時は8世紀に遡る明確な例は未詳であった。珍しい事例であるので、記録（図と写真）を作成の上、筵を中心とする部分をとりあげ、保存処理した。籌木や筵はP.E.Gの20%溶液を含浸したあと凍結乾燥し、土の部分はイソシアネート系合成樹脂の5%溶液を含浸させて硬化した。

（金子裕之）



籌木の出土状況（1：10）



保存処理がすんだ籌木